

明治期の二人称代名詞 「アナタ」「オマヘサン」「オマヘ」

—その諸形と性差との関わり—

房 極 哲

0. はじめに

本稿では、明治期の二人称代名詞「アナタ」「オマヘサン」「オマヘ」の使用実態を体系的に記述することを目的としつつ、これらの語が持っている待遇的な価値について考察する。江戸後期において「アナタ」と「オマヘサン」は待遇価値の高い二人称代名詞であったが、明治期において両者の関わり合いがどのようになったか、またそれが特に性別によってどのように相違していたか、という点について明らかにしていく。

考察の「尺度」はいろいろあるのだが、本稿では基本的に「話し手」の属性を中心に考える。話し手が相手との関係によってどのような二人称代名詞の選択を行うかは、話し手の性別、階層・社会的地位、教養度といった話し手側の問題に大きく左右されると考えられるからである。そしてそれを踏まえた上で「話し手」と「相手」との人間関係を^{*}を視野に入れることにする。

1. 先行研究における「アナタ」「オマヘサン」「オマヘ」の扱い

従来の先行研究では、明治期そのものを対象とした待遇表現の記述的研究が意外に少なく、江戸語の延長線で処理している研究が多いようである。その中で、明治期の「アナタ」と「オマヘサン」に関する主な先行研究としては辻村（1968）、小島（1974）、小松（1996）などが待遇価値について述べている。

先行の論考から「アナタ」と「オマヘサン」に関してまとめてみると、次のようになる。

- (1) 幕末になると「オマヘサン」は衰える。この衰退は「オマヘサン」の待遇価値の低下に伴うものである。（小松 1996）^{*2}
- (2) 明治期になると「オマヘサン」の使用は減少し、また「オマヘサン」が「アナタ」に比べて待遇価値が低下した。（小島 1974, 小松 1996）
- (3) 東京語の「オマヘサン」は待遇価値が大幅下降し、もはや「アナタ」よりも「オマヘ」の方へ近づいている。（小島 1974）
- (4) 「アナタ」は明治 20 年頃は変遷史上注目すべき一時期であって、30 年頃になると、この語の待遇価値の低下は明らかである。（辻村 1968）

これらの研究では男女差が十分に論議されていないように思われる^{*3}。つまり、必ずしも性差に着目した二人称代名詞の詳細な研究とはいえない。そこで、本稿ではこれらの先行研究の成果を踏まえつつ、「アナタ」「オマヘサン」「オマヘ」を性差に着目して考察を行っていく。

2. 明治期の「アナタ」「オマヘサン」「オマヘ」

一般的に女性の方が男性に比べ、丁寧度の高い形式を比較的多く使用する傾向があるといわれている。また、井出（1982）は、現代日本語において「男性と女性と同じ言語形式を使っている場合、男性より女性の方が低い丁寧度でその形式を使っている」としている。こういった性別による言語形式の各待遇価値の相違に関する指摘は時代を遡って明治期における二人称代名詞の待遇価値の究明においても示唆する点があると考えられる。

さて、本稿で扱う資料^{*4}を以下に示す。時代区分は大きく前期と後期に二分し、明治初年から二十年代末までを前期、三十年代以降を後期として考えながら資料に現れる会話を対象として考察していく。

<前期>

『安愚楽鍋』（明治四一五）仮名垣魯文著 明治文学全集1 筑摩書房 1966

『春雨文庫』（明治九）松村春輔篇 明治文学全集1 筑摩書房 1966

『鹽原多助一代記』（明治一七）三遊亭圓朝著 圓朝全集卷ノ十二 世界文庫 1964

『眞景累ヶ淵』（明治二十一）三遊亭圓朝著 圓朝全集卷ノ一 世界文庫 1963

『菖の鷺』（明治二十一）三宅花圃著 現代日本文学全集 84 筑摩書房 1957

『小公子』（明治二十三）バーネット原作 若松しづこ訳 女学雑誌所収（227-299号）1890

<後期>

『社會百面相』（明治三十五）内田魯庵著 博文館 1902

『三四郎』（明治四十一）漱石全集第四卷 岩波書店 1966

『雁』（明治四十四）鷗外全集著作篇第四卷 岩波書店 1936

『寂しき人々』（明治四十四）ハウプトマン原作 鷗外全集翻訳篇第三卷 岩波書店 1938

資料に関しては上に示した通りであるが、『小公子』と『社會百面相』以外は基本的にそれぞれの全集を使用した^{*5}。これらは底本にあるルビをそのまま反映しており、底本を充実生かしていると思われるからである。ただし、『雁』の場合は、最初掲載された雑誌「スバル」では、例えば「お前さん」のようにルビがついていない。これに対して岩波全集では「お前（マヘ）さん」というルビがふられている。調査した他の後期の資料からは「オメエサン」が現れていないことから、岩波全集の読み方は適切であると思われる。そこで本稿では、『雁』に関しては岩波全集を使用することにする。

2.1 話し手の性の違いによる各形式の使用状況

<表1>～<表5>は、明治前期と後期の10資料から「アナタ」、「アンタ」、「オマヘサン」系*6、「オメエサン」（「オメエサマ」含む）系、「オマヘ（「オマイ」含む）」系*7、「オメエ」などを男女別に調査し、まとめたものである。後期の資料において、男性が対等関係で多く使用している「キミ」については本稿では対象としない*8。以下、各表の括弧の左の数字は使用者数、括弧内の数字は用例数をさす。

<表1> 【使用者数と用例数、男性の場合】

二人称代名詞 時期/資料	アナタ	アンタ	「オマヘサン」系	「オメエサン」系	「オマヘ」系	オメエ
明治前期	(安) 4(8) (春) 5(7) (鹽) 3(17) (眞) 7(8) (藪) 0(0) (小) 2(66)	0(0) 1(2) 6(52) 0(0) 0(0) 0(0)	0(0) 2(7) 4(8) 1(7) 0(0) 1(1)	2(5) 3(7) 3(11) 0(0) 0(0) 0(0)	0(0) 3(7) 5(15) 6(25) 1(1) 6(19)	5(6) 9(16) 2(8) 1(2) 1(3) 2(8)
合 計	21(106)	7(54)	8(23)	8(23)	21(67)	20(43)
明治後期	(社) 16(70) (三) 5(33) (雁) 0(0) (寂) 3(66)	0(0) 0(0) 0(0) 0(0)	1(12) 0(0) 2(2) 1(2)	0(0) 0(0) 0(0) 0(0)	10(77) 2(2) 2(13) 2(76)	0(0) 0(0) 0(0) 0(0)
合 計	24(169)	0(0)	4(16)	0(0)	16(168)	0(0)

<表2> 【使用者数と用例数、女性の場合】

二人称代名詞 時期/資料	アナタ	アンタ	「オマヘサン」系	「オメエサン」系	「オマヘ」系	オメエ
明治前期	(安) 0(0) (春) 5(32) (鹽) 5(22) (眞) 2(10) (藪) 8(19) (小) 5(15)	0(0) 1(2) 2(5) 0(0) 0(0) 0(0)	0(0) 4(4) 4(22) 2(5) 2(4) 1(2)	0(0) 0(0) 0(0) 0(0) 1(3) 0(0)	4(10) 6(17) 3(20) 2(3) 6(13) 3(23)	0(0) 1(3) 2(2) 0(0) 0(0) 0(0)
合 計	25(98)	3(7)	13(37)	1(3)	24(86)	3(5)
明治後期	(社) 23(198) (三) 5(25) (雁) 5(15) (寂) 3(176)	5(11) 1(1) 0(0) 0(0)	3(63) 1(1) 2(4) 2(25)	0(0) 0(0) 0(0) 0(0)	5(38) 2(4) 2(7) 1(41)	0(0) 0(0) 0(0) 0(0)
合 計	36(414)	6(12)	8(93)	0(0)	10(90)	0(0)

<表3> 【男女別使用者数と用例数の比較】

二人称代名詞 時期 / 資料	アナタ	アンタ	「オマヘサ ン」系	「オメエサ ン」系	「オマヘ」 系	オメエ
明治前期 (男性)	21(106)	7(54)	8(23)	8(23)	21(67)	20(43)
(女性)	25(98)	3(7)	13(37)	1(3)	24(86)	3(5)
明治後期 (男性)	24(169)	0(0)	4(16)	0(0)	16(168)	0(0)
(女性)	36(414)	6(12)	8(93)	0(0)	10(90)	0(0)
男女全体合計 前期	46(204)	10(61)	21(60)	9(26)	45(153)	23(48)
後期	60(583)	6(12)	12(109)	0(0)	26(258)	0(0)

<表4> 【男女別使用者数の比率比較】

二人称代名詞 時期 / 資料	アナタ	アンタ	「オマヘサ ン」系	「オメエサ ン」系	「オマヘ」 系	オメエ
明治前期 (男性)	21/85 24.8 %	7/85 8.1 %	8/85 9.4 %	8/85 9.4 %	21/85 24.8 %	20/85 23.5 %
(女性)	25/69 36.3 %	3/69 4.3 %	13/69 18.3 %	1/69 1.5 %	24/69 34.8 %	3/69 4.3 %
明治後期 (男性)	24/44 54.6 %	0/44 0 %	4/44 9.0 %	0/44 0 %	16/44 36.4 %	0/44 0 %
(女性)	36/60 60.0 %	6/60 10.0 %	8/60 13.3 %	0/60 0 %	10/60 16.7 %	0/60 0 %

<表5> 【男女別用例数の比率比較】

二人称代名詞 時期 / 資料	アナタ	アンタ	「オマヘサ ン」系	「オメエサ ン」系	「オマヘ」 系	オメエ
明治前期 (男性)	106/316 33.6 %	54/316 17.2 %	23/316 7.2 %	23/316 7.2 %	67/316 21.2 %	43/316 13.6 %
(女性)	98/236 41.5 %	7/236 3.0 %	37/236 15.7 %	3/236 1.3 %	86/236 36.4 %	5/236 2.1 %
明治後期 (男性)	169/353 47.9 %	0/353 0 %	16/353 4.4 %	0/353 0 %	168/353 47.7 %	0/353 0 %
(女性)	414/609 68.0 %	12/609 2.0 %	93/609 15.2 %	0/609 0 %	90/609 14.8 %	0/609 0 %

調査した内容を使用者数と用例数から検討してみると、男女間の使用において次のようなことがわかる^{*)}。

「アナタ」は女性の場合、<表4・5>に示したように前期に比べて後期の方がより多く使用されている(使用者数の比率(36.3% → 60%)、用例数の使用比率(41.5% → 68.0%))。これに対して男性が使用する「アナタ」は、<表4・5>からわかるように全体的に使用は増加しているものの、女性に比べ使用者数の比率(24.8% → 54.6%)及び使用比率(33.6%

→ 47.9%)は少ないことがわかる。ここから「アナタ」は時代が下がるにつれて男女ともに多用するようになるが、男性と女性とでは使用領域ないし待遇価値において差異があったのではないかと考えられる。

「アンタ」は男女ともに使用自体が非常に少なく、後期になると男性からは使用がなくなる。女性においてもく表2>からわかるように一部にしか現れていない*10。使用者の例については第3節で扱うことにする。

「オマヘサン」系は全体的にみて使用比率が低く使用領域がごく制限されていたと思われる。またく表4>から女性の方が男性より多少多く使用したということがわかる。特に、「オメエサン」系の場合く表3>に示したように、調べた資料の中では後期になると男女ともに使用者が一人もいなかったという点で、「オマヘサン」系とは対比される。

「オマヘ」系は女性の使用において注目すべき点がある。前期の場合、「オマヘ」系の使用者数の比率はく表4>からわかるように男性は全85人中21人(24.8%)、女性は全69人中24人(34.8%)であった。しかし、後期になると女性の「オマヘ」系の使用者数の比率は16.7%にまで減っている。また、く表5>をみると用例数の使用比率も36.4%から14.8%にまで減少している。逆に、男性は使用者数の比率(24.8%→36.4%)、用例数の使用比率(21.2%→47.7%)がともに増加しており、女性とは異なる様子を見せている。

このような「オマヘ」系の使用減少の推移は、後期になって「アナタ」が多用(一般化)されるようになったことに起因する可能性があるのではないかと考えられる。例えば、く表4>をみると、調査した二人称代名詞のうち、女性における「アナタ」と「オマヘ」系の使用者数の比率を比較すると、前期は36.3%対34.8%であってほぼ同じ割合を占めている。ところが、後期は60.0%対16.7%であり、著しい比率の差が確認できる。またく表5>の用例数の使用比率からも同様のことがいえよう。すなわち、前期は「アナタ」41.5%対「オマヘ」系36.4%であってあまり差がなかったが、後期になると68.0%対14.8%と大きく減少したことがわかる。

なお、話し手と相手との関係から相手が同性か異性かによって男女でどのような使用の差異がみられるのかという点についても調査してみたが、使用傾向としてこれといった注目すべきことは見られなかった*11。

3. 話し手のありかた

本節では、話し手が持っている社会的な身分・階層*12と二人称代名詞との相関関係を取り上げる。

3.1 「アナタ」、「アンタ」

始めに話し手が上層階級である場合、「アナタ」が男女別にどのように使用されたのかを検討し、前期と後期でどのように相違がみられるのかを考えてみたい。まず、目上の相手に対する用例からみてみよう。

<前期の上層階級>

- 1) 「何を仰しやいます、多助を遣つて良人 (あなた)、どうなさいませえ。」(元武士の妻・お清→夫・鹽原 (元武士)、(鹽 2))
- 2) 「殿様え、貴方 (あなた)はいつ上つても都合が悪いから待てと仰しやいますがね、」(宗悦・町人→深見新左衛門・武士、(眞 2))

<後期の上層階級>

- 3) 「貴郎 (あなた)は暢氣に悪口でも仰しれば氣がすみませうが、夫では折角お世話して下さろうという高砂伯爵に対しても義理悪うムいませう。」(お秀・妻→乾坤一・夫・中学校先生、(社、獮官 (中))
- 4) 「そりやア猶だ素人論ですがナ、貴處 (あなた)と議論したつて仕方が無い。」(高浪崩・代議士→大山外・地方紳士、(社、鐵道國有 (6))

男性が使用する「アナタ」は前期では町人が使用しているのだが、後期になると代議士にも使用がみられるようになる。ここから、上層で使用された「アナタ」は男性においては、後期になって待遇価値がやや低下したと考えられる。しかし、女性の場合は後期でも待遇価値が依然として保たれているようである。

次に目下の相手に対する用例をみよう。

<前期の上層階級>

- 5) 「ナアに貴方 (あなた) 彼奴だつて私 (わたくし) の子ですから私の氣に入らなければ叩き出しても宜いのですが、」(おかめ・武士の妻→丹三郎・家来の子、(鹽 6))
- 6) 「あなたは此老人の云ふことがよくわからなかつたのでせう。」(ハブシャム・代言人→セドリック・子供、(小、3上))

<後期の上層階級>

- 7) 「貴嬢 (あなた) の親御さんのお話は誰も存じておらないやうですね。何ですか、最う余程以前にお亡くなりでムいますか？」(侯爵夫人→加壽衛・藝人、(社、破調 (下))
- 8) 「はア、貴處 (あなた) のやうに熱心に聞いて下さると僕も説教の仕甲斐があります。」(牧師→青年、(社、宗教家 (上))

特に前期において上層の女性が目下の相手へ使用した「アナタ」の使用は少ない。後期の例の場合、文脈を考えると男性が使用する「アナタ」(8)は、女性の「アナタ」(7)よりは待遇価値が多少低く感じ取れる。すなわち、上層に限って言えば、女性が使用する「アナタ」の方が待遇価値においてやや高く見受けられる。そしてその原因としては、上層階級の男女における品位保持の意識の違いが考えられる。また社会的な規範に照らし合わせてみると、社会的な身分の立場上、上層女性の方が男性よりことばの規範・しつけに一層厳しかったのではないだろうか。

次に話し手が下層階級である場合の「アナタ」について考えてみよう。以下に用例を示す。

<前期の下層階級>

- 9) 「此處で彼様してお目にかゝるも貴女 (あなた) の御願が届くお引き合わせで御座い

ませう」(寅吉・柵屋の主人→書肆屋の妻・お岩、(春 15))

- 10) 「モシこんどハあなたとでもおともでねへと見つかりやアどんなめにあふかしれやせんヨ」(野幫間→客、(あ、野幫間の諷刺))
- 11) 「だが、買つて下さればそれで宜うございますが、けれども貴方(あなた)草鞋をおとんさいナ。」(荒物屋の女房・春→新五郎・武士の息子、(真 13))

<後期の下層階級>

- 12) 「貴客(あなた)方のお教育ですもの。学校の先生方や御本を作る方達は何故如斯なに慾張つてるんでせう。」(女中→洋服紳士、(社、教育家(下))

前期の下層男性の場合は、(9)のように目下への使用が中心であるが、(10)のように目上への使用がないとはいえない。前期の男性使用者は他の二人称代名詞を使ってもおかしくない階層(例えば、野幫間、落語家)だが、相手との「立場の関係」、「恩恵の関係」などから待遇価値の高い「アナタ」が使用されたのではないだろうか。この場合の「アナタ」は「格式性」(Formality)を持っているようである。さらに後期になって下層男性のグループで「アナタ」を使用した用例がなくなったが、その理由は明らかではないが、男性が使用する「オマヘ」系の形式の使用領域が広がり、それに代わられたためと思われる。

一方、女性の場合は目下への使用もわずかにみられるものの、多くは目上への使用である。下層女性のグループで主に目上の相手に対して使用された「アナタ」が、後期になると下層女性が使用する「アナタ」(12)には相手に対する親しみさえ感じられ、前期に比べて待遇価値が相対的に低いと解釈できよう。

次に「アンタ」について簡単にみたい。前期では男女ともに主に一部の下層階級(男性：奉公人、馬士、茶店の爺さん、女性：下女、茶店の婆さん)が使用していた。しかし、後期になると男性の使用はみられなくなり、また下記の(14)のように上層の女性にも使用がみられるようになる。つまり、「アンタ」の待遇価値は後期になって変化したと考えられる。

- 13) 「あんた、此の馬は實に珍しい馬でね、」(茶店の爺→角右衛門・お百姓、(鹽 1))
- 14) 「貴婦(あんた)また奈何して朝っばらからお酒なんぞ飲んだの?」(新開令夫人→男爵夫人、(社、貴婦人(下))

3.2 「オマヘサン」系、「オメエサン」系

「オマヘサン」系は2.1でみたように使用自体は少ない。だが、その使用者をみると、前期と後期とで差がみられるようである。すなわち、前期では男女ともに下層階級で使用されたようである。後期になっても全般的に使用者は下層階級であるが、その中では男性より女性の方に使用者が多いことが注目される。以下に用例を示す。

- 15) 「おめへさんのめへだが人間は腹がよくなくつちやア人ハつかはれやせん」(芝居者→旦那、(あ、芝居者の身轟真))

- 16) 「私(わたし)とお前(まへ)さんと寝れば、人が色だと申します。」(お園・女中→新五郎・使用人、(眞10))
- 17) 「俺(わっし)らはお前(まへ)さん、西鶴の手紙や自筆の草稿まで見たもんでがす。」(老作家→客人(社、老作者))
- 18) 「お前(まへ)さん久しく見えなかつたがお違者かい」(姑・ヲツケラアト夫人→洗濯女、(寂))
- 19) 「お前(まへ)さんは見附けない女中さんだが、どこからお出でだ」(肴屋のお上さん→女中・梅、(雁))
- 20) 「お前(まい)さんは自分が好きで不体裁い所為をしてゐるが、」(斧枝(母親)→藤蔵・青年事業家(社、投機5))

話し手の階層をみると、前期では男性は野幫間、芝居者、奉公人、柵屋の主人、茶屋の息子などである。女性は女中、芸妓、卵子屋のお婆さん、荒物屋の女房などが使用している。後期になると、男性の場合は使用者は老作家、飴細工屋の人などが使用している。女性の場合は、姑、肴屋のお上さん、高利貸屋の妻、洗濯の女などが用いている*13。このような使用者の階層からわかるように男女ともに「アナタ」より多少低い階層の人が使用したということがいえそうである。

また、使用者の年齢においても特徴がみられ、前期に比べて後期になると男女ともに年齢が高くなったようである。このように話し手が上層・教養層とはいえない点から考えると、次第に「オマヘサン」系の待遇価値は低下したと考えられる*14。

次に二人称代名詞の「アナタ」と「オマヘサン」の交替を検証しながら、これらの待遇価値について考えてみたい。以下の例は同じ話し手が同じ相手に対して二人称代名詞の交替を行った場合である。

- 21A) 此处で彼様してお目にかゝるも貴女(あなた)の御願が届くお引き合わせで御座いませう」(寅吉・柵屋の主人→書肆屋の妻・お岩、(春15))
- 21B) お前(まへ)さんの方でも其の心底を徐々と現はしかけて下さりやア私(わっち)も実を打ちまけて喋って仕舞ふが、」(寅吉・柵屋の主人→書肆屋の妻・お岩、(春15))
- ここで、21A)の「貴女(アナタ)」は話し手の「格式性」(Formality)から使用されたと考えられる。一方、21B)の「お前(まへ)さん」は「親しみ」(intimacy, closeness)の程度を調節するための話し手の積極的な意志・意図として捉えることができる。こうしてみると「アナタ」と「オマヘサン」の待遇価値の微妙な相違が把握できると思われる。

3.3 「オマヘ」系、「オメエ」

まず、以下の用例をみられたい。

- 22) 「ネエおはねどんおまへのまへだが伊賀はんといふ人もあんまりひけうなひとじやアないか」(まじりみせの娼妓(おいらん)→お茶屋の女中、(あ、娼妓の密肉食))
- 23) 「関取それぢやア済みますまい立ば苦の無い一ト昔あとへ算へて末の秋お前(まへ)

- に連れられ故郷をはなれて此地へ来る途中……」(お増・妻→夫・関取都石、(春5))
- 24)「お園どん、誠に有難う、お前(まへ)がそんなに厭がるものを無理無體に私がこんな事をして濟まないが、」(新五郎・奉公人→お園・女中、(眞10))
- 25)「どうしたつてかうしたつて。お前(めへ)のめへだが。おめへのとこのおはねさんがの。」(車夫→馬丁、(葎7))
- 26)「俺(わし)には全然お前(まへ)の不機嫌の理由が解らんが、」(精神家・夫→妻(社、精神家(下)))
- 27)「汝(おまい)も永年連添つてるから最う少しと貧乏を苦ししないで平気になれさうなもんだナ。」(失意政治家→妻、(社、失意政治家))

女性の場合は前期と後期とで明らかに違いがみられる。前期では娼妓、茶店女、歌妓のような下層の人が主に使用した。さらに下層の人が自分の夫へ使用した場合もみられた(23)。しかし、後期になると2.1で述べたように女性の「オマヘ」の使用人数は大きく減っているが、使用者の層は一般庶民・(主婦・姑)にまで拡大している。また前期のような下層の妻が夫に対して使用したと思われる「オマヘ」はみられない。さらに年配の人が年少者に用いたり(母親→息子)、若い主婦が女中に対して用いたりした例などを考慮すると、「オマヘ」の待遇価値は下がったと考えられる。

一方、男性の場合は、前後期ともに使用者の階級が下層だけでなく、「アナタ」のように多様である点が女性とは異なる。女性に比べて使用者数が多く、上層の男性でも自分の妻に対して「オマヘ・(オマイ)」を使用している。「オメエ」に関しては、前期では男女ともに下層の階級の使用者(道具屋の人、書肆屋の主人、茶屋の主人など)によく使用がみられるが、後期になると「オメエサン」系と同じく使用者が現れなかった。

4. 話し手と相手との人間関係

前節までみてきた話し手の属性に基づいて、本節では相手との人間関係を考察する。明治期における「アナタ」「オマヘサン」系「オマヘ」系の出現を、中心的な人物に制限して話し手と相手との関係から調査した。結果は、次の<表6>にまとめた通りである*15。

<表6>【相手との関係による「アナタ」「オマエサン」系「オマヘ」系の使用状況】

話し手	二人称 相手/時期	アナタ		「オマヘサン」系		「オマヘ」系	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期
男女	目上	15/33(45.5%)	11/36(30.6%)	9/17(53.0%)	0/4(0%)	3/26(11.5%)	0/20(0%)
		13/32(40.6%)	33/58(56.9%)	8/21(38.1%)	3/12(25%)	8/29(27.6%)	0/13(0%)
男女	対等	6/33(18.2%)	12/36(33.3%)	3/17(17.6%)	0/4(0%)	5/26(19.2%)	1/20(5%)
		10/32(31.2%)	14/58(24.1%)	5/21(23.8%)	0/12(0%)	7/29(24.1%)	0/13(0%)
男女	目下	12/33(36.3%)	13/36(36.1%)	5/17(29.4%)	4/4(100%)	18/26(69.3%)	19/20(95%)
		9/32(28.2%)	11/58(19.0%)	8/21(38.1%)	9/12(75%)	14/29(48.3%)	13/13(100%)

「アナタ」は男性の場合、前期は目上への使用が45.5%であったのが、後期になると30.6%にまで減少している。そして後期には目下への使用(36.1%)が目上への使用を上回っていることが注目される。もちろん、当時における社会の男性優位という事情もあるが、後期になって目上への使用が減少した点を考えると、多少ながら「アナタ」の待遇価値が低下したといえるのではないだろうか。

一方、女性の場合は男性とは異なっており、後期になると相手が目上の時に相対的に高い使用比率(56.9%)を示している。しかし、目上への使用が多いとはいえ、必ずしも待遇価値が上昇したとは考えにくい。なぜならば、2.1で述べたように女性が使う「アナタ」は後期になるにつれ使用者が多くなり、全体的な使用領域の広がりとともに待遇価値が低下したと考えられるからである。

「オマヘサン」系は男女ともに前期では目上への使用も目立つが、後期になると殆どが目下(身内)へ使用されている。前期は対等関係での使用もあったのだが(荒物屋の婦人→百姓の婦人(小))、後期になるとこのような使用は現れなかった。また既に3.2でみたように「オマヘサン」系は、後期になると話し手に下層女性が多くなる。このような話し手の属性や相手との関係の変化から、「オマヘサン」系は後期になるにつれて待遇価値が低下したといえるだろう。

「オマヘ」系は女性の場合、後期になると前期のような目上(27.6%)及び対等関係(24.1%)での使用も無くなってしまい、身内の目下への使用しかみられない(主に姑→嫁/母親→息子)。このことから女性が使う「オマヘ」の待遇価値は後期になるにつれ、ごく距離の感じられない相手(主に身内の目下)に対する親しみの発露として用いられるようになったと捉えることができ、前期に比べて待遇価値が低下したとみていい。

一方、男性における後期の「オマヘ」系は目下への使用というのが女性と同様であるが、相手が必ずしも身内でない場合があるという点が女性とは異なっている(野々宮→三四郎、(三)、洋服紳士→女中、(社))。このように「オマヘ」系においても、相手との人間関係が男女ともに異なっており、待遇価値においても後期には両者ともに次第に低下はしているものの、男女間で差異があるのではないかと考えられる。

5. 結びと今後の課題

以上、明治期の二人称代名詞「アナタ」「オマヘサン」系「オマヘ」系を中心に話し手の属性に注目しながら男女別に分けて考察を行った。考察の結果、明治期の二人称代名詞「アナタ」「オマヘサン」系「オマヘ」系の使用状況における男女間の違いが明らかになったと考える。例えば、「アナタ」の使用頻度をみると、男性の場合前期から後期にかけて特に変化はみられないが、女性の場合増加している。また、「オマヘ」の場合後期になると男性の使用頻度が増加しているのに対して女性の使用頻度は減少しているという違いがみられる。しかし、本稿で考察した以外の方法をも考えるべきである。例えば、話し手と相手との人間・対人関係、そして場面による心理的な距離に応じて微妙に変化する二人称代名詞の交替を二人称代名詞の相互の関わりあいから詳細に追求する必要がある

あると思われる。

<参考文献>

- 井出祥子 (1982) 「言語と性差」『言語』11-10
- 菊地康人 (1994) 『敬語』角川書店
- 小島俊夫 (1974) 『後期江戸ことばの敬語体系』笠間書院
(1998) 『日本敬語史研究後期中世以降』笠間書院
- 小松寿雄 (1988) 「東京語における男女差の形成—終助詞を中心として—」『国語と国文学』65-11
(1996) 「江戸東京語のアナタとオマエサン」『国語と国文学』73-10
(1998) 「キミとボク—江戸東京語における対使用を中心として—」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』
- 小松英雄 (1999) 『日本語はなぜ変化するか』笠間書院
『作家用語索引夏目漱石別巻』(1986) 近代作家用語研究会編、教育社
『作家用語索引森鷗外別巻』(1985) 近代作家用語研究会編、教育社
- 坂梨隆三他 (1997) 『日本語の歴史』東京大学出版会
- 佐藤 亨 (1992) 『近代語の成立』桜楓社
- 辻村敏樹 (1968) 「「貴様」の変遷」『敬語の史的研究』東京堂
- 峰高久明 (1976) 「漱石の敬語—「三四郎」の場合—」『国文学研究』60
- 飛田良文 (1974) 「明治初期作品の敬語」『明治大正時代の敬語・敬語講座 5』明治書院
- B. H. Chamberlain “A handbook of colloquial Japanese” (明治 22/1889) 2 版
W. G. Aston “A Grammer of the Japanese Spoken Language” (明治 21/1888) 4 版

<資料>

- 『安愚楽鍋』(明治四～五) 仮名垣魯文著 明治文学全集 1 筑摩書房 1966 (→あ)
- 『春雨文庫』(明治九) 松村春輔篇 明治文学全集 1 筑摩書房 1966 (→春)
- 『鹽原多助一代記』(明治一七) 三遊亭圓朝著 圓朝全集卷ノ十二世界文庫 1963 (→鹽)
- 『藪の鶯』(明治二十一) 三宅花園著 現代日本文学全集 84 筑摩書房 1973 (→藪)
- 『尋常小学読本』(明治二十) (巻一～七) (『日本教科書大系第 5 卷 (国語 2) 近代編』)
講談社 1964 年)
- 『眞景累ヶ淵』(明治二十一) 三遊亭圓朝著 圓朝全集卷ノ一 世界文庫 1963 (→眞)
- 『小公子』(明治二十三) バーネット原作 若松しづこ訳 女学雑誌 (227-299 号) 1890
(→小)
- 『社會百面相』(明治三十五) 内田魯庵著 博文館 1902 (→社)
- 『三四郎』(明治四十一) 漱石全集第四卷 岩波書店 1966 (→三)
- 『杯』(明治四十三) 鷗外全集著作篇第三卷 岩波書店 1954 (→杯)
- 『寂しき人々』(明治四十四) ハウプトマン原作鷗外全集翻訳篇第三卷 岩波書店 1938

(→寂)

『雁』(明治四十四) 鷗外全集著作篇第四卷 岩波書店 1936 (→雁)

〔注〕

- *1 「人間関係」に関しては菊地(1994)を参考とした部分がある。本稿では「上下関係」の基準として生得的な属性である年齢関係を考え、次に社会的属性である階層・職業・地位関係を尺度とする。
- *2 ただし、語の勢力が衰退したからといってそれが待遇価値の低下につながったと考えてよいかという点に関しては疑問が残る。通常、語が多用された結果、待遇表現としての幅が広くなり、待遇価値が低下すると考えられるからである。また、語の語形変化も待遇価値の低下として考えられる。例えば、坂梨(1997:167)と小松英雄(1999:226-227)を参照。
- *3 ただし、「オマヘサン」に関しては、女性が主に使用したということを当時の口語文典(W.G.Aston(明治21年)とB.H.Chamberlain(明治22年))でみることができる。
- *4 示した資料は作品の全部を対象とした。ただし、圓朝の作品は話が変わる時間の差のこともあり、一部のみ扱った。本稿では、『鰯原多助一代記』は一編から七編まで、『眞景累ヶ淵』は一回から十四回までを分析した。また、『眞景累ヶ淵』の成立時期をめぐっては各説があるのだが、佐藤(1992)に従うことにした。
- *5 円朝全集の場合は円朝の作品がまとめられた春陽堂版(大正十五年より昭和三年)が総ルビ、改行なしであるが、本稿ではこの春陽堂版の複製本である世界文庫本を使用した。
- *6 「オマヘサン」系は、「オマヘサマ」(使用者1人(敷))、「オマイサン」(使用者1人(社))などを含む。これらのそれぞれの待遇価値に関しては本稿ではひとまず同じであると考えられる。これらの待遇価値の差については別の方法を考えて論じる必要があると思われる。
- *7 「オマヘ」系のうち、「オマイ」は特殊である。調査した資料のうち、『社会百面相』に限って「オマイ」の使用がみられ、待遇価値において多少の差があるようだが、本稿では「オマヘ」系として扱う。
- *8 小松(1998)では、「キミ」は一人称代名詞「ボク」と対をなして使用されており、明治二十年以降の使用においては知識層、書生から更に年少の男の子へとひろがっていくことなどを論じている。
- *9 なお、<表1>と<表2>からわかるように、明治前期の作品のうち、男性においては『藪の鷺』、女性の場合は『安愚楽鍋』で、それぞれ「アナタ」「アンタ」「オマヘサン」系が一例もみられなかったが、全体の論の展開には影響はないと考えられる。
- *10 また、当時の教科書の『尋常小学読本』の中においても「アンタ」(「オマヘサン」も現れていない)が一例も現れなかった。
- *11 話し手と相手との人間関係は複雑であるため一概にはいえないが、「オマヘ」に関しては後期において男女間で差異がみられた。すなわち、男性の「オマヘ」の使用者の約8割(78.9%)が女性へ使用していたのだが、女性の「オマヘ」の使用者は約4割(42.9%)しか男性に使用していない。
- *12 ここで云う下層とは主に使用人のグループのことである。それ以上は上層として扱う。
- *13 若い少女にも使用がみられる。例えば、「お前(まへ)さんの杯は妙な杯ね。一寸拝見。」(娘・11/12才少女→外国人娘・14/15才、(杯))
- *14 なお、「アナタ」の使用者の場合、一人称代名詞は主に「わたくし」「わたし」が使用された。ところが、「オマヘサン」系の使用者の場合は「わたし」「わちき」「わっち」「おいら」の方が多かった。このような一人称代名詞の使用からも、「オマヘサン」系が「アナタ」と比べて待遇価値が低かったといえるのではないだろうか。
- *15 <表6>には挙げていないが、「アンタ」は前期では男女ともに目上への使用比率が約6割であったが、後期になると女性だけ使用しており、その殆どが目下への使用である。なお、「オメエ」は女性の場合のみ目下への使用しかみられない。これに対して、男性の場合は対等関係にも使用がみられる。このように「オメエ」に関しても男女において使用状況が異なっていたことがわかる。

(バン キョックチョル 筑波大学大学院 博士課程 文芸・言語研究科 応用言語学)